



朝夷巡島記第六編序 四思

原平、義秀、事實、東鑑所載、不過於小壺角
 敵及妙戲海潮捕離鱷三隻事、與建保血
 戰破門拉敵奮勇無前、最後汎舟以走安
 房事也。是以坊間冗籍、唯神其勇力、而不
 知其智術、亦捷于世、至甚者、則云義秀身
 後於冥府、威服閻羅、奴僕冥官、其言可以
 悅閻里小兒、而不足為士君子道也。予嘗
 以謂義盛八子、而義秀為白眉渠、其勇悍



月見六編卷一
 一

非啻與漢樊噲為伯仲其智略亦將有似
張子房何者彼敗軍中善脫難免而不使
敵終身知其存亡當時苟以報怨雪恥之
志則不與父兄俱死也宜惜乎時不至終
漂泊海島而鴻雁之傳信焉者無矣是故
不遇於北條氏以聘之辱則勝乎田橫辭
漢伏劍但以其事蹟無所攷識者為千載
遺憾此予之所以戲著巡島記也初發研
之際予約于書肆文金堂是書刊行至三
十卷則可以結局也爾後六續編簡冊垂
五六然而腹稿未吐盡者幾過半矣光陰
難追又費幾日焉書肆之不飽利以編述
不速為恨予乃倦于筆研獨悔是著不易
果彼我急寬莫奈之何敢思欲因前約輟
筆於是編文金堂允之否未遑告是意本
編五卷手稿成即便是為序

文政九年仲殊之日書于神田廟東著作
堂南檐木犀花陰 菴笠漁隱



朝夷巡嶋記全傳後輯第六編總目錄

第四十九條 諏訪嶺豺狼 照射山鬪鬪

第五十條 莊官林淫婦 山蛭橋殘獸

第五十一條 瀧筵粉餅配 陰惠倒應報

第五十二條 後花十回案 淚種一節籬

第五十三條 家廟投入花 弟迎常葉枝

第五十四條 濱角舐祿物 小壺海巨鱷

第五十五條 由井濱奇貨 執權邸交易

第五十六條 浮雲禳猛齋 團坐席夢話

第五十七條 節義守戶浦 損益頭髻塚

第五十八條 天妙女柱乞 勇悍人貨獵

本編五卷總目錄終右第四十九第五十兩條雖既出前輯總目錄中而釐為本編第一卷因重出以充卷數



兄弟角力不柔
 不剛勇名雖惜
 恥似閱墻
 和と田の新あら左さ衛ゑ門の尉ゑい
 常盛

芋田乃
 陀忠

北條時政之

長舌危國
 平勃未誅
 良人非噲
 汝似呂須

田高



後妻牧之方

小阪太郎

北條相摸以義時

你是陪
臣謨執
國命若
微泰時
九世何
盛

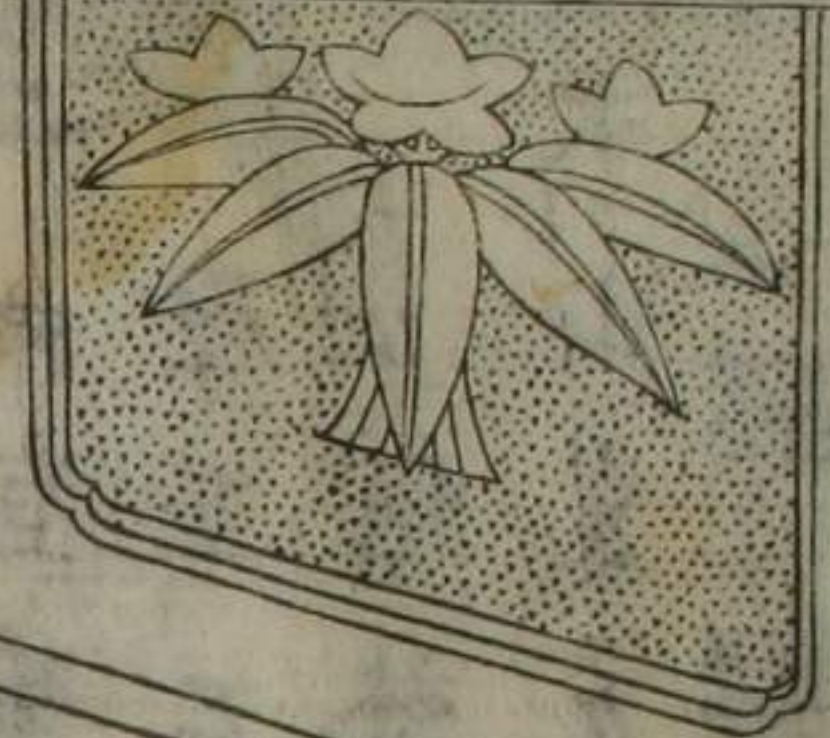


内寵
勿憑
命有薄
厚王石
猶焚
氷山豈久

比企弥四郎
能久



月長八編卷一



盧山不遠

前報未盡
餘殃相同
祖孫終處
在浴室中

源二位頼家卿



二世暗弱
君臣亂離

秦有
闇樂
景盛
似之

印

安達左衛門景盛



その書目毎編五卷ある。景義小第五編と綴り日書肆の時後日之...
 一巻遺りて又書肆の好し任しく...
 補すのさた故本編は格敷の例より倍と致すと二百四十餘頁...
 右の見と出像の中多敷子...
 編と五編は出くこの編は出くこの簡端は画々...
 景盛と比企弥四郎能久の第七編は出され并頼家の修善寺...
 如く皆後編の趣向を今も外見をいり官公の画より第七編...
 ことありと想像せられ一端とをある...
 姓氏追加 小坂太郎 富部五郎 和郎義氏 四郎義直 五郎義重 六郎義信
 七郎秀盛 八郎義國 右兵衛尉朝盛 安達景盛 比企能久
 草賊鼠乃木表平 芋田陀忠二 通計一十三名 崖略併世氏目録

朝夷巡鳴記全傳第六編卷之一

村田

東都 曲亭主人編輯

後輯第四九

諏訪嶺の豺狼 照射山の狒々

さてもとののちのあまひのあまひ...
 案了前勸再說朝夷三郎義秀ハ...
 義邦小に辞別れつ只ひり越路を投く...
 足信つその順逆も拘らど又遠近も...
 寶川より越後の八田...
 四里あり比山路を来つ角嶋と唱へ...
 名あり越の諏訪嶺あり時四月の...
 為萌盡る輕寒輕暖他州の二月...
 似れども日ハ長に獨行言葉歌の

村田

あゝあゝ飽と死の睡眠を催し 餓れが疲労て歩果敢や。この日も下晡
 多し頻に物の欲しくなりし 颯と吹下は山風の慙はせんともて来つる酒の
 香芬と鼻入り多しと 珍らうも好まし所小忽地目覚る心地とく但見れば
 ての村盡処は只獨屋の酒店あり多し 朽傾たる茅の櫓高し一朶の杉の葉を
 掛るハ彼味酒の三輪ありとのみ 甍の謎あへし門邊は猛犬ハとて 狂酒ハすも
 活むとあへし一両脚の尻掛床几ハ寂寥とく 慙ゆめあく突立し土意を
 薪竭灰冷く鍋の中ありし 湯氣絶し義秀ハ性としく 酒肉を食る
 めのあゝ後とも 長途の疲労を息へん為 且十分の酒氣を帯びハ彼大山を
 踏むかかんとあひふれハ 突立する 鐵棒を酒店の門の片隅に倚りて
 菅笠の細解もあへし 誰と在らばや 呼あぐ 床几ハ尻どうち掛れば家
 あゝあゝ奥のこま 一個の老人遠く 出迎へし 客人酒を用あひ 秋五夕をり

あゝあゝ飲有ハ豆腐の石焼と山獨活の 酢味噌茹の ぬりぬれをうらやま
 と向れ 義秀らち 微笑有ハ 兩種共よりて 多し ぬれ 十分酔んと欲を五夕
 なる此酒何よせん 多し 向れ 疾痛を ぬりぬれ 斑ある 齒を 頰し
 うち笑ひ 客人ハ 他郷の 料と 五夕をり ともて あへし 此 尙せ 當州中 此の 片口
 あり 滋養 此の 多し 五夕と 唱ふ ぬれ 是 他州の 酒五合 此の 地方の 五夕 且
 家の 酒ハ 茶麤 濃あれども 中汲あり 酒氣 烈し 味ハ 醇厚し 一ハ
 人を 研を ぬれ 此の 醒と 究め 遅く 此の 故よ 小名 上戸 あり 獨秘
 しく 五夕の 酒の上を 過は 稀に ぬれ 此 國風の 曲子 あり 酔り 入り 五
 夕の 酒ハ 一合 過ぎ ぬれ 研んと 歌へ 多し 誇白 答る 間ハ 悪し ず
 柴折 焼く 豆腐を 煮え 酒を 盪ち 彼 酢味噌 茹 共ハ 冗く 垢 俵
 塗 折敷 安排 多し 来く 義秀 羞る 義秀 笑坪 入り 表

やわらぐ八表と語らせや件の五夕を傾盡して再び五夕の酒を備せわやども喫せむと
 せしむるを盡しうらう程は崎餅求良る雞の檐下まかり来に
 義秀は外を瞻仰ふ日ハ山扱は没えとほあり。や
 時を移しわろとむらりて遠く腰は著る貫緒とさる解つたわらに
 酒の價を取らせ脚絆の紐を締更く左よ管笠引提く嶺を望て突んば
 わやハ急は被留め客人暮さふ程もな。今ありて敷里の嶺とて越えん
 のまど傳もせむ近曾彼諏訪の嶺中を影の狼群ゆく人を害ひつと限を
 昼とども獨り悪むの稀あり。五七人の同行を俟はく嶺を越え加梅
 ちやより近き山里あり女子どものやとふ失ふとあり。下りの程を密
 と。誘引せられけん。彼此隈なく索ねども跡もあらず。女子ども
 邁んとする男子もわら。是は怪しきあり。我も誰にぞあななど。

ちる此より彼山小怪獸二頭栖ると必北と吐く。好く人畜の血を吸ふ
 女子ハ実柔らうく血の多む。のれが這奴男子ハ目と髪を女子ども捉ると
 又り。さびと女子ハ限さるハ男子とて油断せば可憎命を失ふ。これらの風聞
 かれも客入今より夜を犯し彼大山を越えん。幸のて狼の牙を脱すとわら
 又彼獸は腹せのまんあり。山のあむ行地の里あむ。人煙の中枉く今宵ハ
 宿は曉と正首は諫を門の片隅を彼鐵棒とん。只丸庸か。客を
 皇主は生かされなく。天意は随あり。欲寡くせむ。心丹田の下。あな
 雲時も内は動。物亦外より害を。人ハ獸を怕る。何れもぬり。
 怪談とあ。客を權。管笠と欲。世渡。方便。路を
 食りて旅ゆ。のふ。想。酒を喫。轡。嶺を越。為。件。

月...
 一

怪談に驚されくあふ歌らばこの快解をいふせん。○
 あやハ顔あつたは腹立之眼を睜りまれば好意を云云といひおぼしむ腹立
 登著を阿容々々と立返り宿賃せとてか勸解ゆいと吐くを耳をひぬ義秀
 袖を拂ぬく衝とつて鉄棒をぬき突立く邁しるまゝいふを忽地日暮
 乃山腹ハ他所より入相の早かよ比四月廿日あり三四日の鳥夜をれば豫て準備の
 續松火を鑽核道は燭と鐵棒右よりと誣訪嶺は攀登す小登る人臨
 絶る深山の夜はぬく寂寞は山氣肌膚を犯し夜風面を撲り犬く巖石路
 横り樹根は足を取らふふ惱り目よるるハ星の光月よ笑めハ谷河の碎け
 落つと凄く義秀匹夫の勇者かぬバ武藝は誇り膂力を頼る漫よの身の
 危れを忘れらふあなむも既十分の酒氣を帯てハ進と退くとの懶く年少

これハ血氣強くてかす夜行とせらるる。○
 登り或ハ降り往來て今ハも巔は近つたぬんとわらふ二十四日の月ハ如く儂ハ
 子の半の夜ハこの比の夜の短くとも巔も登著る既ハ夜半を過せハ不知
 案内の故をともとあふもの。○
 蕉火を續更にあら頻りハ焦燥あふ又一段と登果る樹拉深る處まれば
 忽然とく狼のあく声高くせをり義秀これ物ともせだをわらふ向てく程
 左右の山卯木のさくくと戦ぐとを。○
 頭れをくも真圓より圍り義秀も此も駈る前向のわら狼を
 跳越つ邁んとは後方より一隻の狼腹の如く走菟りく義秀が腓腸を
 例えと近つて程ハ義秀これを尻目よ足と飛く破と蹴る踢られて些
 怯む處を風標の如く身を振へく鐵棒推取延つ眉間と丁と響く一ハ声

苦と叫びあむ平浪伏く死せりその隙に前より狼又後より走菟を義秀を
 身と交して肉を鉄棒に打れこれ亦筋骨砕けくしるる残る五頭の狼の
 為体は活路を求難む彼此へ送巡せり程は義秀透きしと叫びく四角八方に
 立れば狼は避け易く逃とも脱せしとあひん忽地人のどくふ立くあつて腋の間に
 明晃たる氷刃を抜出く撃んと義秀これと信とをく原來癖者ごころれ漏
 しせと棒とり直しく大喝一声嘯る菟れが勢ひ千鈞の石とて難卵を推は
 異かた狼のみを瞬間に骨も續らば殺されし一頭送りしをこれとて
 らも落れぬ戦慄れく腰も抜しを抗声せりて免れんと叫ぶ義秀
 呵々とうも笑く鐵棒右より立汝ホこの假狼愚民を惑へ旅人を殺す
 その罪を造りし憶ふは是汝ホ山賊のどと抄れぬもこの餘の同類を
 頭領立す奴は死に決す首伏せよとてわらわと責問ハ山豪ハ平伏し頭を

搥くさめ安も及びせぬん某ホハ平泉の經任が大將と四天王と呼ばれ
 重連が隊兵のゆい經任滅びしと死矢藤五は後を與て逐電せりあり又
 矢藤五はも捨られ今ハ頭領もゆい又この外ハ同類をあつて矢藤五ハ義に
 經任と見絶く厨川の柵に赴死彼柵の大將より象子彈平太貞持と許す
 軍要金三千兩と掠奪り某ホと物く越前ハ三國凌よ赴ちて遊女を夥
 聚合し酒宴遊興夜を日と継る樂も中央ハ影の金を沙のどく用散せ
 りく疑れ忽地人ハ密訴せられ遂に守護より指向られる捕らるる兵ハ不意に
 襲く且く防戦せり克くもあつて壁を毀屏を棄く食散るあり
 一より矢藤五が柱方とあつて某ホハ下隊七人當國に逃れ来くあつて山林に
 せし近曾この山中を怪物夜あり人々と反交する風ありありと猛る
 して七人齊く狼の皮を被り夜移を速り里人旅客と追切しと露命を

捕の沙汰を脱ぐ跡を隠す便ありとち相譚ひふりてある所は大人
 一人當千鬼神を欺く本更あるを夢やも知りしやれが獨行を侮る
 忽地命を隕し六人の名云云あり其ハ前乃木の哀平と唱えよめて云は神威と
 犯するその罪萬死に當れども願ふ慈眼佛意を乞ふと勸解より
 義秀安く冷笑ひ原来汝ハ彼鐵盾矢藤五下隊下の小賊あり一汝ハ賊
 將經任を肩ともするをかり然るを況矢藤五と名彼奴はとち柵と走り
 且も天誅は漏せしを遺恨あれ後汝ハ教を盡し幾百人聚合せしめ
 この小唾く虫を取らうと易かり勸解されば汝一箇と免まはれぬ
 ども窮獸既ハ尾と垂く媚て命を乞ふは猶夫もこれを殺せんが今實
 汝ハ首と且く軀は預めせん迹とも誅せしむるも又天意は任をへしと

ののけく近邊の藤蔓引おろし縛め御兒のどく幸をく老翁は
 撃くおろし陰霾を雲月を隠し朦朧とち隨は夏を寒に山風のど腥く
 肌膚を徹しく毛骨栗立つ程をあれと怪げ多二頭の獸突然と走來く
 六箇の賊の痰口より流れる血を吸く共は餘念はれが如し義秀方こそと
 透し酒屋のあしと云と不問語とをりる怪獸ハをわれ先酒をせん
 鐵棒とち取揚ぐ寇近つれ邪と声けく先進し一獸を徹塵をあれと
 撃下せが獸も亦眼をみく一文許花退はつ三頭等しく疾視する晴の光下と
 射て長庚よりも輝り義秀ハ一の棒と擊損くと遠恨堪は再び間近く
 よせんともれが兩獸も油粥を尻送し透を窺ひ義秀焦燥く打棒を兼らんと
 進むと互落くと頭短く颯と引く程もあはれ一獸忽然と後方より立ち捕る
 ととるも義秀をくんとく鐵棒霎時も止め輪々々と風車の遠くは振

廻く前後は些も着けを進退不測の修煉の妙奥精神ありかまき
 鬼を捕く槍法は怪しむ獸ハ敵しむる共侶も逃んとしむる
 過ぎた追携も些し後れ一獸の隅幾夫と打折け下声叫ぶ声と俣ハ
 威まありるを義秀ハ頭の二頭もほ登り首さりとて朽とくも雲
 かれせし月さぬふ不知案内の山中を追ふともいそ及志をひひし
 徐々と奮の処は退た松の株は尻も掛く且汗を納れともその樹の幹
 繫れ乃本の裏平ハ怪獸の光景と義秀が疾働は我を忘れて解
 如く呆惑つづつをう浩処は峯上を隔く咄と揚る閑声の谷は座
 その勢九百人許り照ら焦火のえをわかれつ隠と漸々は近つて
 義秀遙は信とんく意あろもぬぬのそまのこの山賊の定當夜
 だ狐狸の所為故とまわれかともわれ這奴何ぞりのさむらるる人の

うめて塵ゆくとれんぞと獨あろ小領は衝と身を起し件の様と小腰
 扱え立ちる且して彼衆人ハ間近くある隨は真先は進しハ是れ一個の武士
 ありる年齢ハ五十のう人と三四ありあつらん藤子野装束と腰小
 朱鞋の両のどりわげ小跨く左も重藤の弓は握太あると携る背は捕
 前の籠を負やう相後者共も或ハ弓箭或ハ竹戟及列卒繩と要す
 みれば後れと進より當下武士ハ義秀ととぬかすぬかす其処ある
 什麼何人ぞと問へ義秀声高やうこれハこの山を過る旅人あり和殿ハ亦何
 人ぞと問えされこれ擬議せられ津川の莊官やう血山盆九郎高盛と
 呼ぶもの之邊曾この山は野の狼群やう人を害す多う又怪獸あり女
 捉るとせえ此彼とも小獵彈さんと里人捕夫野ぬく今朝より深く
 入りし捕さうとハ照射山獲物ありれば二輕の家路とさく還らば國の



血山盆九郎

いひる



諏訪嶺
義秀七賊二
獸を退治す

草子一ノ巻六ノ二

東平

物と獲らるるも和主ハ何木の故小夜とて山と越えんと再問ハ義秀とて
 此の陸奥より越後を過りて越中へ赴くめ角鳴は宿とてを敷道とて
 この山路は日暮り今少し先の時なり此の処ゆく痕は打たれ
 山賊六人を打殺してその一賊を縛置りそのお怪獣あり二頭忽然と走きて死
 鮮血を吸ひて又これをも撃んとせよその疾と飛鳥の如く猛怒と虎狼の
 此のあつれもどかしくその一頭の肩尻をさうふ打たりて倒れざりて逃
 路周るれば追ひも索後どかてこの草賊の来歴を責問し小箇様々の奴原
 ありて迷もなき吉もあらん金九郎は果も果も驚き且飲びて後者は
 蕉火を抗きしとて伏実檢しとて小果しとて大蛇の根の皮を被り畏
 共中へ六人肉破れ骨砕け死骸八算を茶せとて又一人ハ藤蔓りて
 餘り繫れり尺これの如く大蛇の邊り今もがまも峯上りて人生
 たると野一金九郎ハこの光景よもあつて驚噴しと恭しく左右の身を膝指つ
 義秀にち對ひ凡眼明なれば世の豪傑と認められ殆ど失へり願ハ海客
 ありてよ和殿が一臂の助にありてこの山賊を悉誅伐せられの如く一雙の怪
 獸を獲り事既ゆひつる如く某今朝より獵暮りて真夜中には及ぶと眼ハ
 遠るものありとて空しく還らんとせり今峯上りて怪獸走すの彼射留と
 小程も忽地は付きて炬光の就く熟視れば奇怪の形状の如く此の肩葉より
 腋下より打破られ骨砕け血の流るるを野一原來の疾で斃れし付度ハ
 野一けんこの人を捉るとの怪物と認めし尚懸生をとりわらんといふ人
 軀短刀をとり刃を深く刺しをさし皮肉堅く刃を受忍辛しくその刀を
 刺串たてし足を縛り杖は掛く六箇の里人小昇しやれども和殿は繫れり
 彼猛獸疑ひありとていひて後方をさへりてその物これへと

下知されば里人ホハ件の獸をほり近く昇りまうふ又一兩人蕉火を旅照しく左
 右小立り當下義秀ハ徐に進むこれぞんふ獸の惣身四尺はあまりく面を
 画す夜叉のごく眼圓は唇厚く牙尖しく口の大地をこゝ頭は連りく耳の下に
 及べり況又長爪ハ劍のごく赤黒た毛ハ赤熊に似く頭毛を長く蓬を乱れ尻
 もを垂り死しを肉眼を閉む志を遂む惡相ハ怪しものをも疎義秀ハは
 さぬかざる猶つゞくとん程は盆九郎も又進みより某社ありし沈瀬を好て
 山又山より入ると屢ありし獸をえびと何との物やんと問ハ義秀
 沈吟しこれハ佛の種類ある嘗聞唐山劉宋の建武年中
 鷲々の雌雄二頭を進らせしとありしを鷲々又これを佛々といふ國俗の山標と
 呼做せしを佛々と異あり時宋の明帝その主人丁壺小問あり鷲々を形
 づるものぞ登て言さくこの面相人ハ似く紅赤色あり毛ハ猢猻に似く尾あり

よく人のぞくものゆふ鳥の声の如く生死の事を知り力千鈞を眞字足れり
 及踵のさる膝をなれば則物小倚る人を獲れば則先笑く後小これを食入り
 獵人因之竹筒を臂に貫き誘ひつゝその笑ハ時を俟て速く手を抽て
 錐もてその唇を釘めし額に著れば猛とて必死とての死を候て裂て
 血を取らめありその髪ハ甚長りゆり頭髪とて佳血ハ鞞及排を添ふ
 堪らうこれを飲ば人小鬼をえと有とあり明帝やと画工は命とてその形を
 圖せりあり本草集解ハ所見あり今これぞんく彼をあり人ハ佛々といへども
 遠く下さげれ人を吹や死との唇を及て笑めりも正しくなるの好く
 人畜の血を吸めりハ素よりその身ハ血あり類を感じく嗜する人と
 言精細ハ解諭せば盆九郎ハ歎服の事額ハ推當く感する事半明とあり
 和殿ハ實よとの武芸の技輩なるものやハ文学や亦蘭也りも貴名とあり

正をゆゑに願ひ名告免く宿所へ俱く歡びの盃と勸めんとあれ愛この
 俊又也と只管答て己ざりける。かれども義秀ハ聊かやあれが終ふその實を
 告ごこねあひ子も免賞美いよく分過り某元永安房の浪人浅江小登六を
 以のり親族もや妻子もをれが武者修行とせかゆとく旅より行ふ月日と詠
 有り此度ハ越の中國は志をうあれがあけ縁竭むハ再会をべし紫首の表平
 置土産を進らる免せんとも誅せんとも国法のおあり計ひ免をぬ退んといひ子に
 立別れんとしりく盆九郎ハ袂に携て遠く引苗めを酷情か某ハ遺り
 此の莊官る甲斐のあく民の害を除れて土地は功ある旅人と下宵も苗めを
 これを勞めとあハ後日守護ありん外を蒙らんと疑ひ中柱と且く立ありん
 とこの時引く故のバ義秀ハ已とをゆと僅もその意は任り却説山盆九郎ハ
 若黨軒松妻二郎亦両三人分付六箇の賊の首を刎ととがあはれ被きて

此の庄官る甲斐のあく民の害を除れて土地は功ある旅人と下宵も苗めを

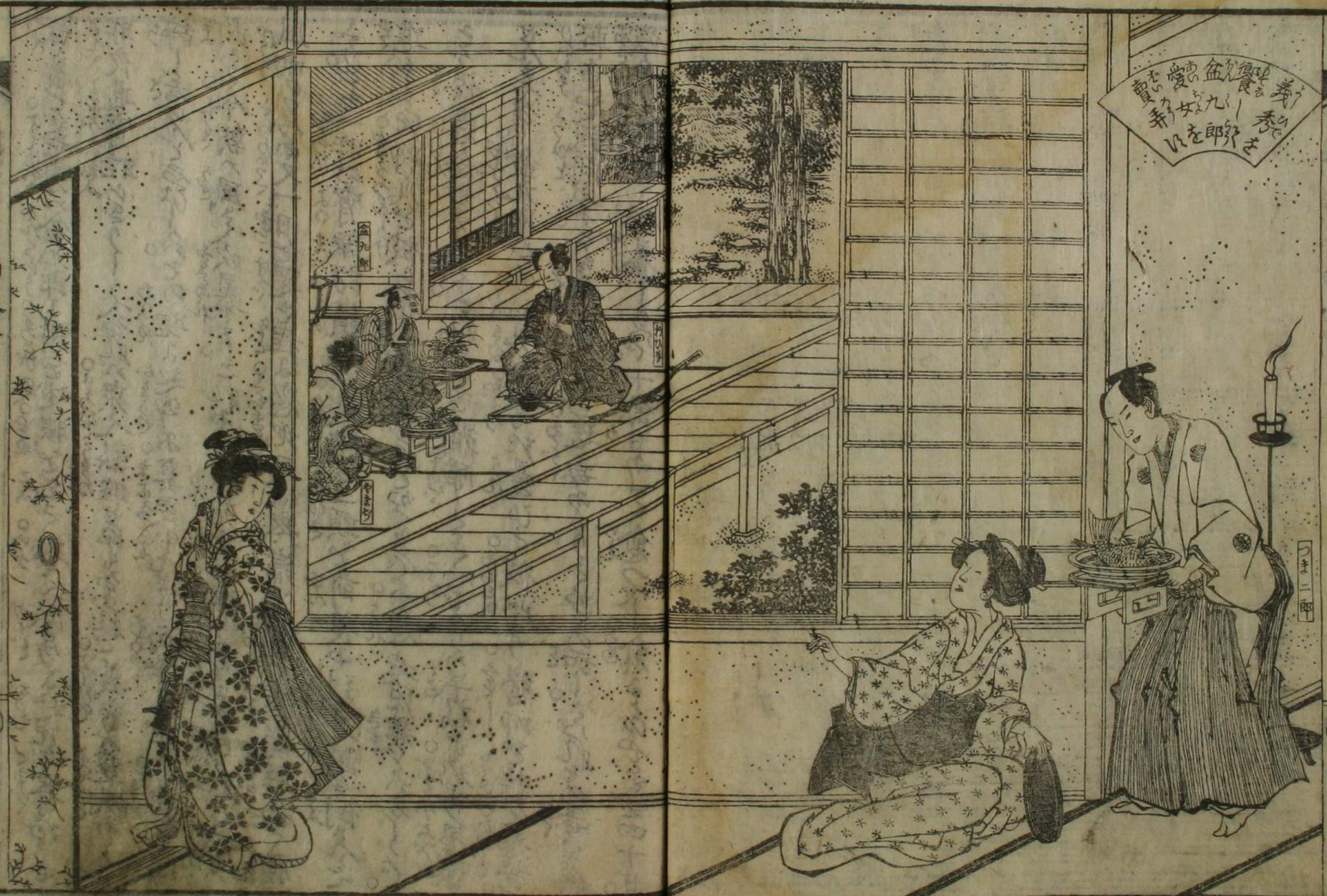
後輯第五

莊官林の淫女
山蛭橋の残獸

再説莊官山盆九郎八妻をめぐりて只むろの女児ありその名を山路と
 呼ばる年八七八あかかん片山里に生育どもその才貌醜く産母の國府の
 一のありれば幼稚なる筑紫琴を幾組習うけん土地は早稲の風流文を
 たり母ありて後ハ父の寵愛称すく佳塔をかくと擇む田舎ハ人物
 質朴ありて山路が意は稱すめれば縁談今ハ整とてこれなる品を運
 情とよほすめもあへて親盆九郎ハ女児の爲に奸と防とを偷見を御さか如く
 深寛に養立く後蔭が女児やハ劣らばとあひり他話休題盆九郎ハ
 義秀と譽たせんともその宵酒宴の席を閑ふ海味小疎地山里をいさ
 庖丁ハあはれとも柳葉の年魚の素焼藻伏束射の骨膾をど種々酒食の

準備せり東道態大々々々書院は燭臺を指並々義秀を管待六
 奴婢ハハ銚子と執事あり配膳は侍もありく質まねと稱入る當下
 盆九郎ハ茶しく盃と扱つ義秀は勸めく浅江ぬし恥ウハ滋味珍
 饈まわねも願ハ一度過一之某何ホの福ありて飲まらば廿の豪傑
 値偶の歡びのめ成討とく死山賊異獸の一時は滅せし頃附驥の
 面をかきり通上忠節ハこれまよくやハあらん記録は載せ子孫に
 傳へく話柄と成べはの皆是和殿の賜められハ不寸志と表はか村
 酒と嫌れハ本望とてと義秀も亦饗膳の謝と述礼を盡して或ハ
 受或ハ投送も浮つ浮られて初献や果しと盆九郎ハ又義秀に
 對ひく某一個の女兒あり山路とを名つけらるど松ハ又ハ筑紫琴を
 とさ者り彼と看よ今一度過一之と勸め山路々々と呼ぶる且ハ豫て

準備をあらん山路ハ艶妖ハ結髪化粧と綺羅やある夾衣に摺落
 ある帯やの字の似く結下て屏風の背よりと親の後方ハ坐を占て且
 義秀と拜しけ當下兩箇の婢共筑紫琴を握来て山路ハほろハ推居
 色ハ盆九郎ハ山路ハ列の一曲とと促せどよハ羞らひら面
 色ハ種ハまをとりつとさやある匣の中より擇取る假川とと素く細
 ぞの指ハ細く調子と試し梅枝ハも鶯の啼ぶとく唄ひを客
 あらの咲ハ顔りハ耳を傾けらるど獨義秀ハ声色を好むハ
 厭く多人も心を用ひ管待を辞んともさげがわく胸中ハ九彈と
 辞ハ盆九郎ハ送懐くあらの強まらやかく山路を退して盃
 盤をとり納め湯ととのわら程ハ婢共ハ客房ハ臥蓆と布設と



つま二郎

告る。○義秀ハ盆九郎ヲ謝シ述服を乞ふ。躬ク臥房ニ赴テ容ヲ静ム。昨夜通宵睡ラズ。入レバ衆人熟睡セシム。義秀ハ翌夙ヲ去ル。今朝ハ風之吹暴。金九郎ハ頻リ小苗ヲ已ム。義秀ハ風雨ノ爲メ又一日ヲ過シ程ニ忍地足ニ疼痛ヲ覺テ左ノ向脛高ク腫ル。一昨ノ宵諏訪嶺ニ被拂々ニ頭ヲ前後ヨリ著倒ス。進キ死聊カニ被ラレト云ハレ。○苦痛酷ク心ヲ早レ。○歩不健。○懸念セテ。○金九郎ハ此ノ形勢ニ驚キ憂ヒ。○彼等ヲ醫師ヲ招キ病癆ノ輕重ヲ訊問ス。○全ク惡獸ノ毒ヲ如ク。○如ク毒ハ。○氣長ク保養ス。○十餘日ヲ愈フ。○愈ス。○三四十日。

慎ク禁足セシメ筋縮リ骨冷ク廢人ト爲ル。○五人ヲ四ハシ。○此レヨリ盆九郎ハ醫師ヲ擇ク湯劑膏藥授ク。○日毎ニ義秀ハ勸メテ五日ヲ膿血潰エ七日ヲ瘡痂ヲ生シ十三日ニ全ク瘡ヲ癒ス。○義秀ハ總角ヲ下シ病ヲ癒ス。○後々再發セ。○且ク禁ヤラ浅ク。○ぬ人ノ請意ヲ破ラ。○日々明暮。○又十餘日ヲ經テ。○鼻月雨ニ稍霽。○夏半ニ過リ。○先ハ盆九郎ハ義秀ヲ退屈セテ。○武ヲ討論ス。○その日消。○或ハ江湖ノ雜談。○燭ヲ秉。○義秀ハ性トシ。○生平ハ言葉寡。○談論ハ取讓。○妙論意外ニ新。○盆九郎ハ感服。○捨テ。

あり一日具に告ていめり言究り卒命を以て無礼ことあられん其
 今一條の商量あり寔小奇しは縁しあかき事を不文とせ八且誠よりいせん
 量日見参入りし女児山路八年もあ十八もなりてり皆を以て死用意
 その人を扱はれ今に至れ其れはこころ十餘村の長く其の莊園も
 あり鄙語よみ鳥かじ里の蝙蝠よ似れども里人ホは尊敬せられ
 あり耕牛あり奴婢十餘名を使使へ衣食も乏し然るもわは邊鄙の卑
 職と嫌れども山路を和殿は妻しく職役所領を譲らんとあつる光陰
 過易に白駒の隙に喩らふ血氣は任して旅あり行は武者修好あふ
 今泰平此世ありあればをり武を用る時あはる願わはあふ苗りく生涯
 無為を樂とせり宿望はこころの和殿のありのうをゆといと正首相譚
 へハ義秀安く眉うち擧り一所不住の某とあつると罵りてははの言はあふ及ん

と秋之死をあらはれしものぞん某性僻不羈り人の塔とあり果てん
 あり且をくより思起して武事修好の爲國郡を遊歴せんと欲せは北國
 せり極めを況京あり西の四國九州はまを寔に光陰は白駒の隙と
 過る如く尚中途より抑苗せられ生涯悔も及びくえをく放遺せられ
 送あつて之と推辞を聽く推りて和殿の武藝を既をを諷訪嶺を目撃
 たりその勇力の携ひ鐵杖ゆく推量の廻國修好せはをを誰のこの
 右に突死相応しはぬ婚縁を強く勸る嗚呼やんれと某も両刀を身帯ゆ
 のあふ言へ口よりあは駒も及びく嫌れりとい意を盡し言を盡す
 この依已まばあれの日より送恨を解んあは深く深念をあらはれをを
 果後ハ義秀困るとい又他人の厚意は恃りあは薄情よ似れども匹夫も
 その志を奪えり況大丈夫はものを宰我子首を謀約りていを説き

とも別々呑んりもな。ちても海聴まひの病瘡全く愈せもあれ袖と拂之
 去らんとこの餘の尋思ひんぞと声高くあはれ随ふ氣色なるそら
 盆九郎の愁は不覚あつたひひ子く悔れまふ腹はとととと色も眼は
 肚裏まをわうこの人實はと女見と嫌ああひく且く底意を探らんを推
 ああらんぞん考へ一朝一言小緯整之死あはれせん支あんとあひ久あ
 ぞ雑談は紛らうの遠おゆふ強さるるや却説四山盆九郎のあひ起せし
 縁を推辞まてあひ已くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 情は疎くとも豈そのあつたらんやその身の浮浪を省く久後遂くこと
 あはれらんぞ家祖の世平家盛あり一時よりこの一郷を管りて元暦
 文治の年間より鎌倉殿の御家臣あれも村落國府へ遠く入るは知れりも
 かく況親しく鎌倉へあひり勤るよはるあはれも彼人と女塔ませは武藝を

文学とこれより家を具まてこれやとほへくをあふ輕諾の信裏に彼人
 即座小兼りさういへの性浮薄あはれ後此は就於彼まつはくも走のく
 かたどとあひ骨中のまへくその夜竊は山路のあはれ親あはれかを示は
 要を記さかれどもこれ彼浅江小豊六と塔ませやとあひつみづう説教めは
 武者修仍の志願ありと彼人あはれうけしむとあはれかもあし小豊六のう
 かく山賊異獣と退治くと民の爲害を除き一宿の賓客之脚の痠の大
 とも愈えりともあれども醫師の歩めと許さねばかひら籠りて後然あはれ
 まかとも降暮を五月の空に輝かれば軒の三水音も絶せば夜衣を護るあは
 夏あはれと冷かり山里のあはれく海もあはれとあはれは席床不樂しく在ん
 ぞん今宵より宵毎は彼人の枕邊へまん男が日来嗜まの伊勢物語を
 りて邁く讀んで慰めあはれとあはれは被くもあはれ山路の頼の根むらや羞

心せうしをきくわきく兼なりかて山路の初便の比あり物の本と兼つて客
 房へ赴くと或は子ニツ或は丑三の深き退却のつて臥房へ入るとかたを奴婢
 への情由よく知る密に謀しむ盆九郎の獨笑して緯を成ぬとあつた
 謀計を浅くかれこれ仔細原れば山路の親小分村のまて宵々毎は義秀を
 慰ふ秋と多へばあつた深き縁とあり密夫あり盆九郎が傭若黨は軒松
 妻二郎と鳴る陸奥の信夫元晴は仕へるものなり元晴の戦役と賊の兵火は
 圓山の館へ灰燼となり比妻二郎は辛しく動と渡し圍を脱れて越後の津
 川小落苗り由縁の家へ寓居して一日々々と送る程小莊官屋敷ふた入りく
 三四月を経るを抑ふ妻二郎は今茲二十五歳の故主の戦役を外めんく
 逃竄れるものなれば素あり人のありを賞はるやと又いふ容貌美く
 してとの進止賤しかた且算筆人なり不優くまはるものありこの時盆九郎が
 家の若黨且く身の暇を乞へて舊里へ退りし盆九郎はものみ又立
 たりする日あるとこの妻二郎とよび取て月傭ませ一日より心を用ひて勤れば
 盆九郎は代人の人をゆると抱ひて早晩宿所は起臥せせ不便のなほあり
 たりする程小妻二郎は今且この主めが盆九郎が意は稱す出頭するの終るに
 山路も竊小愛驩びく親多く物ひけりたりとくもあひあはせり小人罪
 加抱きとて罪ある玉とも統小外視の関を越ると幾遍といふと盆九郎は
 これを知らぬ山路が月来塔をみくるとの塔縁の整ざりへかち密夫あり故を
 一点むりも曉らひ今義秀と苗人とくうぬ所移を女児は誨ふその淫奔を
 肥まわんこれごとくあつたこの宵々山路の親の意を受く義秀が起臥を
 客房へゆくやあつた彼やうへち寄も著む次間あり穢室を妻二郎と密あふ松
 語の粗漏とく義秀はすもあつたつてあひの隨は淫ふまの宵とて移り

これハ時分をえ計りてくつたてく箇様々々いん内祝言のすかれハ媒妁のくも
 ありと後日よ里人を擇ぶのくもその人わん今宵ハ黄道吉日のくも五月と
 りともけいりあつたあつたあつた真のくも竊謀合のくも山路のくも
 呆れく霎時回答もゆをだ忽地宵ハ塞りくもそうれりくも今も今も推梓
 べくわくね愁の眉を恥れ面色は紛りのくもあつてくもくも領地をわん先
 惚子どとあひる親のくも無慚なれさる程は金九郎ハ今宵の酒食と塩梅
 見とく且くも庖福を去らだ遣使のくも奴婢共が揃る楯盆ハ雨あつてくも神此
 鳴る候と疑れ敲く青菘ハ人の日の中七種雜を不似りくもその献立を候へハ
 塩竈混布ハ巻賜これの座著の肴や青鷺の吸物ハ片暮着積のわんハ
 火とり加減ハ肝要とくもろのくも世話を焼味噌ハ苦り切る露の葉の刻花とくも
 雑物を上を下を返してくも癖の粉れハ便をゆる山路ハ竊小妻二郎と物陰ハ
 招きりくも今宵のくもと云云と告て頻よち泣く涙の隙は又いん流江に
 やんが止宿せし下ハ座敷の塞がりくもわん夜ハ稀ありハ家尊ハ人ハ
 云云とわれりくもをわんあり絶ぬ夜毎のくも枕も夢と覚く浅くや終ハ
 脱れぬ今宵の替烟飽を親を欺たり不孝の罪を重ぬくもわんを棄つ
 捐りて他夫よ添もんや契り言ハ偽あつてくもわんをわんハひん
 又泣沈め小妻二郎ハ歎息くも絆既ハ急なれ且くも猶豫あつてくも今宵
 見身をぬく走ん追人蒐りて脱色くもくも共侶ハ死んのもくも往方ハ云云
 ありける暗号ハ箇様々々と具示くも慰れハ山路ハゆるゆる涙を飲てくも
 夜を契つて謀合ハ別れりかくも山路ハ外視を竊くも日来愛するくも衣を
 につつり祝は包くも臂近ハ沙金流銀十五六両計ハくも妻二郎ハ逃せ
 小妻二郎ハ亦密々ハ起りの準備くも日の没果るくも程ハくも黄昏ハ宵ハ

ちをり限りもなれを避んとひら横路を退んとひら山路はま
 妻二郎の合る弓箭もその甲斐なく身を縮く共侶の樹蔭に寄りて
 程は彼妖怪の遭遭する山路を女と引綱と小脇を楚と引提く峯上で
 北走るやん妻二郎の吐嗟と叫ぶ怒りの堪後をわたりあを忘るるやん氣を
 激しくしそく單燈籠と樹の枝に掛置く弓小箭刺さるやんと腕を地
 麻痺れてのむもせん志をあら朽ととと焦燥く帯は燈籠結下つたやん
 弓箭を携く何地までも追慕るやんあれも妖怪の三友をり先をわたり
 後方をええりの徐々とゆるゆると追慕んと喘々直と走ふ近つて九折
 ぬた小造れが忽地足失ひたり妻二郎の共侶を死せむ契り情人と妖怪に
 撥撲れてこれを生く何れ命を的に往方と索極く生死を等しくせざんやと
 罵つ狂ひの其処ともある深山とやん入るやん山路を娘と頻るやん名を
 呼ばれが彼方中女子の声く逃ふ名を呼ばれを疑ふもわらぬその人
 さへ今を意なきも復たなやんといふと及が心小勇まわりあはれけり
 呼ばれ声とあるも慕ひのけが世百の月夜に夜を如丑の半にかり辛
 しく近つたる前面は溪河横らるやんあや樵夫のまかみ路を常やん獨木
 橋を掛り夏あまの樹の上小山蛭のいと多かれが山蛭橋とやん深く空
 る甲斐もかく彼妖怪の所為あや橋を彼方へ引捨られが渡せぬもわら
 ざるやん山路の川を隔りやんおの下の只ひとつたやんこれと被妖
 怪の何地遊ん影もせむが怒り勇まき声とあり立ちその橋を投樹を南と
 ともせむ山路を招きやん位のそとを起さぬとひらひらと
 せむ松の株もをけくとうもれも腰立松もや竊小秘を指さし示しと
 ちと位ゆる訝り限りもなれが妻二郎の指をさへく秘遊は向られが



山道



夜の山路
命を喪ふ

山道

山道

さねはらぬが不便なりと食をひき獸の残毒憎むが此度ハのぞく道えやと及ハ
 怒り堪むと心煩しに早にも橋を彼方より引る川幅廣く流水急に劉備の的驢を
 借られば輒く渡らんやたれいせやとひきむ件の方前と云ふりてあはれ物を
 忘れやう是究竟と取揚ぐ水際の樹蔭に退れり克雪固る程をあれ辨むれ
 山路が宵前へあぐ口を著て血を吸ひ腸をうめ吐く高味も堪ぐらん又
 肩と及一の額のおもむと掩ふよりあやうや仰せなく笑ふ矢をうけて標と射る
 窺遠むを額の真中肩より不縫魚で鉄四五寸裏袂をふ羽さる遍てを立る
 残酷無雙の悪獸の窮所の痛残を要時にも勝せ四下を響く苦痛の舌と舌
 仰せは小倒りなり義秀のあひのあふ悪獸を射とあはれむを甦生もさるわあんと
 及ばらうと投捨く鐵棒突立々と浅瀬を索ねく川源へ五七町赴けば川幅狭れ処
 ありく文餘の過るべしあも水中の背を願せし大なる石えあれがあやうと

鐵棒を小脇に挟きて岨より石へ石より前岸へ只二飛に跳越く進みゆくと兩三町
 へぬくも走り近つた又鐵棒を佛々の呪を衝推くあまうは強く當れや
 忽地頭と突断り抜月光を熟視する曩小撃さる北なりふこそあはれ形
 大蛇あうあう方小の牡やうやかれの雌雄ありとのひ世の風はも空からをよれ
 一頭を漏せしもの透憾くあひふ三十餘日莊官林に抑留せられ甲斐ありた獨
 言して立在む程小前面に夥集合る人あり先多一人眞愛を合しあやうと浅江
 ぬ浅江主とゆかると義秀送小ええれば月の光と里人ホウ松の火光を紛れ
 莊官皿山盆九郎が里人ホウ松とゆかると當下盆九郎の恥る面色を彼方
 小腰を折め面目もか浅江ぬ女見ううを知られあんなれ被ホを追留んとく
 この山中より入り今もあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 正の趣を諮詢し山路を妖怪に捉はれる且その横死の為体を報をさると語く

此度の終は死絶する山路が横死の哀を返すもあらざれど和殿の某を疎果て欲
 別を告げし夜を犯し復た山を踰ゆを心づかれし和殿のつらき
 この溪川を渡りて女児の難言を懸れかん願ひ詳し知りて又の義秀此言
 擬議せし其の前日あり辞し去らんとあひかをも和主の在宿掃かれが意を正
 せし今宵の騒動はふ忍びを苗守せし老僕小思意を示し止宿醫自療の副
 沙金下巻を送りて去りて去りて又この山辺に迷ひてを流すに比連漏
 する佛を射くこの今愛のあひも難言を返りし本意は協今今しもを老を
 のひりて棒突立て邁んとされ金九郎の遠く水際を翹きと抗くよ侯も浅江ぬ
 和殿が曩日の勸戒の國府より安えおけて鎌倉殿の死下知あり則その勸賞も越後府
 衣下襲沙金五十両下されしを府城より傳れし其の預り置りし和殿の
 報さうし女児と婚姻整の宵小塔牽崇とあひかたは宿所小伴ん枉て

涉りてと高ぶるぬれ義秀眼と瞪りて尾陋之盆九郎女児を餌し
 逢く計りの今宵推す暫烟とどうんを準備せし嫚侮の愚人の奉動女児の
 横死これあり興さう況某も賜ひ物と汝が塔牽崇のあつらんやと鄙吝
 色小觸れしその俣を送し弟んが夜曉の女児の横死に不孝の冥罰汝
 死て子を喪ひ八年來の膏腴とんその方と肥せし悪報をとり病瘡あつるを今まで
 汝とあつせん因果の道理と感悟と私欲を塞ぎて民を憐れめ縣小循吏あつた
 猛虎も子を負わく江を渡りて去りしとあり毒鱈の人を捉まるとの溪水小住とあり
 譬の宋均韓愈が善政およびと或の山賊或の悪獸汝の配下は集合しこれをの
 奸詐の招く天理寔に怕る今さう鳥許の佞人小告る要死を告れし後の世
 道土産よち驚さんあつたけの地小抑苗せられ比聊もあつた浅江小豊六
 告の養父の家假名あつた四月中旬陸奥の役小平泉を火攻りて賊首

経任と誅戮しひり厨川に赴はく五百賊を屠り朝夷三郎平朝臣義秀の具はくは
友鶴との一妻あれどもこれの色を愛ふわが邊土の卑職小目とてけく人の噂とある
るや山路の死をばも又妻三郎の奸夫あくとも故う望の空華をんれどもとて心
飽ふる警徳して忽地をり入る深山路の繁茂の下に樹隠れて往方もあざかりに
金九郎の義秀のひ懲るれのみをば豫ていへ假若くは朝夷ありと初て知りてのめく
あきふ呆れ里人共侶は忙然と目送り天明て流水は梁とてと山路妻三郎の誅
莊官林へ昇ると返して懇に葬ぬ金九郎もこの下に話やさる程は義秀のその話且
行地を下りてこの宵に新茂田に宿投り又数十里の路を經て同國の高田に赴き
四日と走り市振の駅あり越中より物入りて泊澤あり急ぎその六月の上瀬稍若神
を著る畢竟義秀相向許々の事後物語甚麼を必と次の巻に解分をてわん

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之一終 **村田**

